

● 提言 ● 自分との対話のこと

大阪大学名誉教授
宮地 裕

学習でも生活でも、言葉というものは、吐く息・吸う息、人の一生のことである。ほかの人の言葉でも、時として、自分にとっての生涯の珠玉となる（二年第七單元「胸の底の人と言葉たち」）。人は毎日自分の中の自分と対話している。考えるということは、そういうことなのだから、と思う。考えることが、その人のなかに、なにものかを蓄積する。書き残された言葉は、その思いの軌跡であろう。

こんな詩が手許にある。一つは十二節一連、もう一つは四節一連で、いずれも五七調（一部分七五調）の文語詩という時代ものだが、戦後間もない昭和二年・二十二年の春、一高寮歌（注）として残したものである。読んでいたくのも恐縮だが、来しかた行く末を思った若い時の言葉を許していただくとして、それぞれの一部を引く。一つは、

「敗れにし 国に聳ゆる 富士の嶺の 雪をあはれみ かへり来ん 友は幾人」（第十節）

「丘ならで 誰か抱かん 去りましし 純きみ魂を 傷つきし 若き心を」（第十一節）

この詩については、たまたま斎藤茂吉が読んで好感をもってくれたという記録がある（『茂吉随聞（十八）』田中隆尚／『ももんが』昭和三十三年六月号初出）。

もう一つは、

「りよりりようと 笛吹けや友 愛しきは 追はじと言ひし

君のみは 寒空を截り 雄心の 調べ鳴らさん

たまゆらの 春に命は ありやなし

丘にも花は 咲きにしを

あてなる花は 咲きにしを」（第一節）

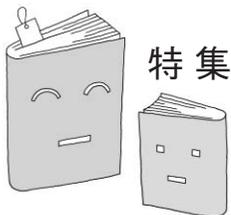
わが来し方を顧みれば、予想や思案のほかにあるのが人生というものらしいと思う。これらの詩も戦時中のいろいろな経験があったり、東京を去ることがあったりして、生まれたものと言えるだろう。しかし、こういうことは、人それぞれにいくらかあることであって、稀には、志を立てて終始一貫、人生を生き抜いた人がいるかもしれない。しかし、本当にそうかどうかは本人の「最後の詞の最後の一句」（森羅外「最後の一句」）を聞いたとしても、なかなか分からない話だ。棺を蓋しても定めがたいのが人間というものらしい。

「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」（『論語』「為政第二」）の「思ふ」は「考える」意のようだから、「我思ふ、故に我あり。」という西洋哲学と（日本語において）呼応するものようだ。教科書の單元名にも、似たような趣旨の言葉が見られる。「自分を見つめる」（一年）、「心を聞く」（二年）、「心の在り方」（三年）などである。事は常にわれわれ一人ひとりの身边にあり、思索は常にわれわれ自身のなかにある。言葉は、「こんにちただいま」のことであるとともに「いついつまでも」のことでもあるのではなからうか。

（注）昔の高校・大学予科の学寮の多くは、学生の作詞・作曲による寮歌を持っていた（一高寮歌は約三五〇編）。今なお全国寮歌祭があり、地方ごと・学校ごとの寮歌祭やその集いが行われる。独特な懐メロである。

宮地 裕（みやじ ゆたか）

大阪大学名誉教授。一九二四年東京都生まれ。著書に、『新版文論』『敬語・慣用句表現論』（ともに明治書院）などがある。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員。中学校国語教科書1（平成十八年度版）に、書き下ろし教材「胸の底の人と言葉たち」を執筆。



特集

日常の中で 生きる言葉